

前回、「新世界」について書いたら、けっこう評判がよかったので気をよくしていると、ガイナックスの武田氏があらわれ、「今度、『アベノ橋魔法商店街』の続編として『シンセ界阿呆昇天街』というのを作るようになりました」

とのたまうので驚いた。うーん、これは時ならぬ新世界ブームが起きる兆しではないのか。

と、ここまで書いて、このエッセイが掲載されるのは、当然、四月一日だろうとたしかめると、全然ちがいましたね。もちろん嘘なので、情報チェックしてもだめよ。というわけで、「新世界」シリーズの後編である。

新世界を舞台にした映画やマンガや小説や歌やなんやかやはいろいろあるが、外から見たイメージと、内側からのイメージは、ちよつとずれていると思う。

たとえば新世界というと、赤井英和とかじゃりん子チエとか「ふたりっ子」といった名前がすぐに出てくるだろうが、新世界の人間にとって、じゃりん子チエへの思いは毀誉褒貶いろいろあつて複雑である。映画版「じゃりん子チエ」が新世界の映画館ではさっぱり入らなかつたという話もきいたし、私自身、今はディーブなファンといえるが、はじめて第一巻を読んだのは、大学に入ってからだつた。長いあいだ、「新世界のことをマンガにするやつ? アホか。どーせ、しょうもないに決まっつとる」と思っていたのだ。じゃりん子チエについて語りだすと長くなるので、これ以上は割愛するが、

たしかに赤井ほどテツの役にぴったりの人間もいないだろう
 (実際、去年、舞台でやってたしね)。

歌でも、そうだ。なんというか、一種の「美化」がなされているように思う。新世界にちなんだ歌というのはけっこうあつて、たとえば有名な「王将」では、「空に火がつく、通天閣に……」という歌詞が出てくる。実際、通天閣の真下には坂田三吉の碑があるのだが、あれは私がこどものころに建てられたもので、たいして古いものではない。しかし、新世界を扱った歌のなかで、もっとも有名なものは、なんといっても、「づぼらや」と「すし半」の歌だろう(ここから、新世界グルメ篇に移ります)。

づぼらやというのは、新世界にあるてっちり屋で、シロナガスクジラほどもある巨大なフグのはりぼて看板が目印の店である。その昔、芦屋雁之助が「新世界のづぼらやで、づぼら連中集まって……」と歌っていたのを知らんか？ 知らんわなあ。この店は、とにかく信じられないほど安くフグを食わせる店で、売れない頃の藤田まこと(てなもんや三度笠で人気が出るまえ)が、あまりに暇なので、毎日、俳優仲間とここの二階でフグを食いつつ、酒を飲んでいたらしいが、そののち人気が出て、高級フグ料理店で上等のフグを食べる身分になったあと、しみじみ当時を回顧して、「今食ってるのがフグなら、あるとき食っていたのはいったい何だったんだ」と書いているのを読んだことがある。高級店なら、てっちり一人前が一万円以上したときに、一人前がたしか千二百円だったのだから驚く。ところが、づぼらやよりもっと安い店があつて、それが「すし半」である。づぼらやのてっちりが千二百円だったとき、すし半は一人前が千円しなかったように記憶している。そして、私はこどものころ、しょっちゅうすし半に連れていってもらい、安いフグの味に親しんだので

ある。すし半のテーマソングは、「通天閣からすし半見れば」
〜」というものだが、箸袋に印刷してあったの知らんか？
知らんわなあ。「てっさ」(フグ刺しのこと)なんか、注文し
たら、五秒で出てくる。マクドナルドより早い、まさにファ
ーストフードだが、そのてっさが、乾燥していて、皿にへば
りついてしまい、箸ではがすのに苦労するようなやつなので
ある。でも、それでもうまかった。私も、長じて、サラリー
マンとなってから、お客さんを接待するのに、いわゆる高級
フグ料理店に行ったこともあるが、ふくよかでみずみずしい
てっさは、「すし半」のものとおなじ名前の料理とは思えず、
藤田まことの感慨がよくわかった。でも、サラリーマンを辞
めてかなりになるが、今、てっちりを食いにいこうと誘われ
たら、やっぱりすし半かづぼらやに行ってしまうだろうなあ。
高いフグは、恐れおおくて喉を通らない。安もんのフグを、
ポン酢の勢いでうまく食べるのが、てっちりの醍醐味とい
うものではなからうか。なからうな。

新世界には、ほかにいろいろおいしい店があるが、たと
えば本通りにある「更級」。店のなかからのぞける中庭に、
なぜか鉄製の鶴がいつぱい置いてあるこの店は、こだわりの
蕎麦屋として有名だが、個人的には蕎麦よりうどんがうまい
と思っている(私が、いわゆる更級蕎麦があまり好きではな
いからかもしれないが)。カレーうどんも肉うどんもなんで
もうまいが、とくにうまいのは「すうどん」。私の親父は、
この店に行くと、ネギを入れただけのシンプルな「すうどん」
を二人前頼み、どこか七味唐辛子をかけ、私が、箸を割っ
て、さあ、そろそろ一口目を食べようかな、と思ったころに
は、もう二杯とも食べ終えているという荒技を披露するのが
常だった。熱くないんかいな、と私がきくと、「熱いとか感
じるまえに飲み込んだらよい」と、秘法を伝授してくれたが、

ふつうの人間がそんなことをしたら、喉も胃もただれてしまう。しかし、当人はその食べ方が粹であると思っっているふしがあるのだ、しかたがないのである。実は、私も最近、この店に行くと、つい「すうどん一杯」と頼んでしまう。近頃のはしてきている、腰の強いさぬきうどんとはちがって、あくまでもつちり柔らかく、それでいて、噛んだら心地よい抵抗がある、大阪のうどんである。

洋食屋の「凡」も有名な店である。本通りから、めっちゃめちゃ狭い路地を折れたところがあり、ぼーっと通っていたら見逃してしまう。ここは、ビーフシチューとかビフカツをカレーで煮込んだやつとかいろいろうまいものがあるらしいが、私は、こどものころ、カツサンドしか食べたことはなかった。ここのカツサンドは、めっちゃうまくて、かつ、めっちゃ高いのである(こども心にそう思った)。数年前、久しぶりに入ってみたら、席は満杯で、常連客が、全員、ぼーっと口をあけて高校野球に見入っており、マスターもかたわらに立って、ぼーっとテレビを見つめていたので、あきらめて帰った。

本通りにある中華屋の「三好」も、最近では改装して、フカヒレ料理の専門店になってしまったようだが、昔はしょっちゅう通っていて、その頃は、ニラ肉炒めが超うまかった。というのも、普通の中華屋のニラ炒めは、ニラ炒めといっても、モヤシとかで水増ししているのに、ここのニラ炒めは、ほぼ百パーセントニラばかりを炒めたものだったからである。今はどうなってるかしらない(ニラ炒めがメニューにあるかどうかかもしれない)。中華屋「三好」のとなりには、甘党の店「三好」があって、ここは「糸切り団子」というのがうまい。ここも、ほんまに春夏秋冬通してしょっちゅう行き、夏はかき氷やところてん、冬は磯辺巻きやお汁粉を食べたなあ。

あのころは、まだこどもだったので、お汁粉のような甘いものを食べることも可能だったのだ(今は、見るのもいや)。

ソースの二度づけお断りで有名になった串カツ屋も、ジャンジャン横町を中心にいっぱいあり、「だるま」なんかはいつ行っても行列ができるほどの繁盛ぶりだが(すごくおいしいとは思うが、串カツをそこまでして食べんでも、とも思おう)、夏の炎天下の昼間、シャッターをおろした串カツ屋のまえを通ってみなはれ。えげつない臭いでっせ。まさに、巨大な「油の塊」が路上にあるような感じである。そこを通過するときは、呼吸をとめ、一気に駆け抜けなければならぬのだ。

昔は、「十円寿司」というのがあって、なにを食べても一貫十円なのだ。今の回転寿司は、安いところでも一皿百円前後だから、考えてみればあれはめっちゃめっちゃ安かった。小皿の醤油をつけるのではなく、板前さんが、刷毛で醤油を塗ってくれるスタイルである。これは、新世界ではなく、もつと難波のほうに行った裏通りの話だが、小さなたこ焼き屋があつて、ここがたこ焼き十個十円だった。つまり、一個一円である。信じられない話だし、誰に言っても、信用してもらえないのだが、たしかそうだったと思うんだけどなあ。私も、うる覚えなので、責任はもてませんが。

ホルモン焼き屋もやたらと多くて、店によって、タレの味も全然ちがう。客が立て込んでくると、座敷で勉強していた小学生ぐらいの子供らを、「外でやっといで」と追いだし、そこに客を入れるような店ばかりである(今は、鶴橋にあるようなすごく高級な店もある)。マメとかセンマイとかココロといったホルモンの味も、そついつところではじんだ。小学校二年生ぐらいのときだったと思うが、はじめてセンマイを見たときは驚いた。ボロ雑巾かなにかをちぎったものに見え、人間の食べるものとはとうてい思えなかったが、親父に「食

べたら百円やるで」と言われ、金に釣られて、おそるおそる飲み込んでみると、これがめっちゃうまではないか。以来、焼き肉屋に行ったら、かならずセンマイを頼む人間となった。ほかにもいろいろおいしい店はあるが、これだけはどうしても書いておきたいのは、「勇」という天ぷら屋である。魚介類に小麦粉とタマゴを水で溶いた衣をつけて揚げた天ぷらではない。大阪では、いわゆる薩摩揚げのことを天ぷらというのだ。つまり、ゴボ天、赤天、いか天、白天、平天……といった、魚のすり身に具を混ぜてあげたやつだ。新世界とは、交差点をへだてて、対角線にあるが、ここの天ぷらはめっちゃくちゃうまいので、ぜひ一度食べてみてほしい。とくに、ゴボ天。そのへんのスーパーで売ってるゴボ天に比べたら百倍うまいでっせ。

「勇」のとなりには、「松谷文山堂」という小さな書店がある。ここは、ほんとに小さなころから世話になった店で、幼いころは、手塚治虫、石森章太郎、松本零士……といった人たちのコミックスを(「海のトリトン」も「マグマ大使」も「W3」も「火の鳥」も「ノーマン」も「百物語」も「どろろ」も「人造人間キカイダー」も「サイボーグ009」も「マンガ家教室」もみんなみんなこの店で買ったのだ)、中学になるころには、SFマガジンやハヤカワ文庫や創元推理文庫を(「キャプテン・フューチャー」も「デューン砂の惑星」も「テクニカラー・タイムマシン」も「青い世界の怪物」も「ドック・サヴェジ」もみんなみんなこの店で買ったのだ)、高校になってからはそれらに加えて、スイングジャーナルなんかのジャズ雑誌を買った。今では、雑誌、コミックス中心の品揃えになってしまったが、私には、昔の、何でもあったころの魔法のような店が懐かしい。ほんと、こどもの目には、どんな本でも置いてある店に見えていたのだ。

というわけで、いつまで語っていてもきりがないので、このへんで終わりたいと思うが、皆さんも大阪を訪れたら、一度、新世界に足を向けてみてください。なかなか……その……アレですよ。

(了)